

彗星だより

キンネケ彗星後日譚 此の彗星の軌道については既述の通り、昨年末 Merfield 氏が $T=1927 \text{ June } 29.54517$ とした要素を発表し、今年初、アンボー氏の観測を利用して、Crommelin 氏が $T=1927 \text{ June } 21.1564$ と修正した新要素を発表し、これによつて多くの観測が行はれたのであつた。ところが此の Crommelin 氏の要素にも尙ほ多少の誤差が認められて、奉天で山本氏は取り敢へず $T=1927 \text{ June } 21.088$ と改めた(本會 BULLETIN 117 號)のであるが、其の後、外國から來着しつつある報知によれば、Crommelin 氏が 2 月 25 日から 5 月 1 日までの観測を以て、第 3 回目の軌道要素を算出し、 $T=1927 \text{ June } 21.0730$ としてゐる。之れと前後して、コペンハーゲンの Bengt Strömgren 氏は

近日點通過 $T=1927 \text{ June } 21.064 \text{ U.T.}$
 近日點引數 $\omega = 170^{\circ}22'35''.10$
 昇交點黃經 $\Omega = 98 \ 8 \ 34. \ 3$
 軌道面傾斜 $i = 18 \ 56 \ 25. \ 9$ } (1927.0)
 離心率 $\log e = 9.836076$ (對數)
 平均運動 $\mu = 590''.428$

近日點距離 $\log q = 0.016698$ (對數)
 尤も之等の軌道要素は何れも皆暫定的のものであるから、今後決定的のものが發表されるのを待つて始めて確かなことが言へるのである。

彗星の光度が意外に強かつたことも外國の人々が皆驚いてゐるらしいが、中心核のシャープな事に皆驚嘆して、6 月末に國際天文同盟から發せられた Circular には、Crommelin 氏が “wonderfully well defined” などといふ電報を載せてゐる。山本氏は此の核の直徑を約 10 秒と見たが、Crommelin 氏も全く同じに 10" と見てゐる。

東京天文臺では 6 月下旬の頃可なり曇られて、大した観測は不可能であつた由キンネケ彗星に因んで、例の米國は又一般に變な騒ぎ方をしたらしい、即ち 6 年前の迷信流行と同様、今年も此のキンネケ彗星の尾の中を地球が通るさか言つ

て多くの人々を迷はせた者があるらしい筆者が近頃偶然 New York Times の 7 月 3 日の號を見たところ、Ballou と言ふ人が寄書して、彗星は 6 月 27 日に地球を通過したけれど、別に何も變つたことは無かつた。最強力な望遠鏡でも尾は見えなかつた……6 年前、此の彗星が地球を通過した時、尾は二つに分れたのであつて其の中、長い方の尾は彗星よりも前進してゐたのが數年前それは木星に食はれて了つた。そして、短かい方の尾は地球から反對の側に向いてゐるので見ることは出來ないのである』云々、大に迷信家を嘲笑するつもりで、出たらめなことを書いてゐる！ 之れに比べて見るに、我が日本では、今年の彗星接近の時に當り多くの人々が注意はしたけれど、迷信めいた事が少しも無かつたのは愉快なことであつた、これで、米國は完全に日本よりも後進國となつて了つた。

コマスツラ彗星 (1926f) よほど遠ざかり、今は太陽の向ふ側で乙女座を東行中光度は 15 級であるが、11 月頃から朝早く東天に見える筈。但し大望遠鏡を要す。

プラスイト彗星 (1927a) テンマルク國の Julie M. Vinter Hansen 女史が去る 1 月 17 日から 3 月 29 日までの観測位置から下記の軌道要素を算出した (I.A.U. Circular 160)。

近日點通過 $T=1927 \text{ Feb. } 14.503 \text{ U.T.}$
 近日點引數 $\omega = 231^{\circ}50'.84$
 昇交點黃經 $\Omega = 18 \ 47. \ 71$
 軌道の傾斜 $i = 92 \ 21. \ 27$ } (1927.0)
 近日點距離 $\log q = 0.01518$ (對數)

之れによると、今年 8 月中はエリダン座の星から η 星の方へ西行してゐるが、9 月には鯨座に入る筈。光度も約 12 級であるから、20 センチ級の望遠鏡でならば見えるであらう。(詳しくは BULLETIN を見られよ)

リード彗星 (1927b) 9 月中は蟹座の西端 β 星の西北 5° ほどの所を徐々に東行してゐるが、光度は 14 級に近いから観測は殆んど不能である。